

ウクライナを侵略から救えなかった核兵器に、 地球を救うことはできるだろうか？

アドリアーナ・ナザルコ

「ウクライナは核兵器を放棄すべきではなかった。」

こうした言い回しを最初に聞いたのは、私がまだ 6 歳の時だった。その運命の週、当時ウクライナの大統領候補だったヴィクトル・ユシチェンコが暗殺未遂事件の犠牲者となった。テレビに映し出されたユシチェンコの顔は、毒物の影響で不格好に腫れ上がっていて、私は顔をしかめた。父は画面に目をやり、電話口で首を横に振りながら、祖父に同意を求めようにつぶやいた。「核兵器さえ持っていれば、ロシアは今日、私たちの国を脅かすことはなかっただろう。私たちは安全だったに違いない。」

それから 20 年近く経った今でも、私の友人や家族の間では、この言い回しが繰り返されている。彼らの考えでは、核兵器はウクライナの国家安全保障にとって絶対不可欠な一部であり、ロシアが攻撃して来た時に備える安全装置であった。ウクライナの人々がこうした考え方になることを責めることはできない。ブダペスト覚書に調印し、協調的脅威削減 (CTR) プログラムが実施される以前、ウクライナは世界第 3 位の核保有国だった。これらの核兵器をウクライナの指揮統制インフラに統合する技術的な課題はさておき、このような実質的な抑止力があれば、いかなる敵であっても侵略を思い留まるだろうというのは、正しい理屈に思える。

正直言えば、私も長い間、核兵器を保持することがウクライナを救うことになると考えていた。私がどのように間違っていたのかを述べてみたい。

国際関係学の学生が最初に学ぶことの一つは、トーマス・シェリングが理論化した核兵器と抑止の論理である。シェリングの論理の重要な原則は相互確証破壊 (MAD) であり、敵国の核兵器によって存立の脅威を確信した国家は、報復を恐れて自国の核兵器を使用する可能性が低くなるという考え方である。相互確証破壊は、核保有国を脆弱な安定の中に閉じ込める。エスカレーションがもたらす自国の存続へのリスクを恐れるあまり、対立するどちらの国も核戦争を避ける道を選ぶのである。このバランスのおかげで、シェリングの核抑止の概念は、冷戦時代に世界を核による消滅から救ったと評価されることもある。

今日、物事がこれほど単純であればいいのだが。

過去において抑止力が機能していたことに疑いはない。世界は核兵器の発明を「なかったことに」できないのだから、当時はそれが最善の選択肢だったのだ。その代わり、際限のな

い核軍拡競争は、確実に世界を破滅へと導いただろう。問題は、抑止力は今も、そしてこれからも私たちを救うことができるのか、ということだ。私はできないと考える。

一つには、核抑止力の脆弱な「安定性」が、人類を「安定性・不安定性パラドックス」という予測不可能な窮地に追い込んでいる点が挙げられる。核保有国間の明確な意思疎通と、敵対する脅威に関する正しい評価がなければ、このパラドックスは不安を生む。不確実性の論理の上に成り立つこのような国際秩序が、真に安全でありうるだろうか？

瀬戸際外交も変容している。技術の進歩は、「低威力」戦術核兵器による「精密」攻撃の可能性をますます拡大させている。ロシアはすでに、ウクライナ戦争を通じてこうした兵器の使用を予告しており、ドミトリー・メドベージェフ元ロシア大統領は、ウクライナの反転攻勢が成功すれば、2023年7月にでも核兵器の使用が必要になると述べている。これらの兵器の支持者は、その使用によって民間人や環境へのリスクを最小限に抑えられると主張しているが、それらが大量破壊兵器であることに変わりはない。さらに、戦術核兵器の使用は、戦略核兵器使用のしきいをも低くするかもしれない。

他にもまだある。抑止力は常に、予測不可能な主体（指導者、暴君、国家安全保障会議）の推論に左右される。このことは、シェリングがその理論の中で考えているもう一つの「MAD」、つまり非合理的な行為者の「狂気」に繋がる。敵対者がある行動をとると思っていたのに、それとは異なる行動をとって私たちを驚かせた場合、何が起ころのだろうか？

戦争が始まったとき、私は多くの人が感じた衝撃を覚えている。「なぜプーチンはこんなことをするのか？彼は何が起きるのかを理解していないのか？」答えは簡単、イエスである。彼は理解している。今もそうだ。プーチンは戦争を選択することで、侵攻による領土的・政治的利益が国際社会から課される結果を上回ると考えている。国際社会がロシアの侵略という選択を不合理と受け止めたことは、「安定性・不安定性パラドックス」の危険性や、核武装したウクライナの未来がどのようなものであったかについて、重大な疑問を投げかけるはずだ。

ロシアの現代の指導層は、ウクライナの「肉挽き機」に何十万人もの兵士を送り込んで死なせることに何の問題も感じていない。

別の世界線では、ロシアの指導層は、現在と同程度の死傷者を出すウクライナの戦術核攻撃を容認するだろうか？

目的を達成し、戦争に勝利するためとなれば、容認しないとは言い切れない。別の世界線において、核武装したウクライナは、通常兵器による侵攻を阻止するために先制核攻撃を行い、何百万人もの市民の命を犠牲にすることを本当に厭わないだろうか？

私にははっきりとした答えが出せない。

これが現代の核抑止力の問題点である。レッドラインの線引きが不明確である以上、核戦争がどこまで拡大するか、あるいは拡大しないかはわからない。核武装したウクライナは、現在のウクライナよりも安全ではないだろうし、90年代に核兵器を放棄しないという選択をしていれば、国際社会から受ける恩恵ははるかに少なかっただろう。

そして、「強制」の問題もある。

ロシアは、核の恫喝によってウクライナに譲歩を迫ることができると考えている。こうした強制は、伝統的な手段だけでなく、国家が支援する核テロリズムを通じても現れている。欧州最大の原子力発電所であるザポリージャ原発をロシアが占拠したことはその代表例である。

非常に残念なことに、かなりの数の学者、ジャーナリスト、政治家がこの餌に食いつき、ロシアの核ヘッジのためにウクライナは交渉のテーブルにつかなければならないと主張しているのだ。最悪の事態は、ロシアとの関係悪化を恐れて、ウクライナへの武器供与を制限したり、分散させたりする国が出てきたことだろう。こうした行動は、ロシアが国家政策として核の威圧を使い続けることを助長し、グローバルな核不拡散体制を損なわせるものである。

核兵器による破壊の脅威が、私たちのモラルや、自由と正義の原則への献身を疑わせるような世界に生きる必要はないはずだ。この暴力の連鎖を終わらせる唯一の方法は、核兵器をきっぱりと廃絶することである。

疑いようもなく、世界的な核軍縮には多くの課題がある。私を含め、これほど多くのウクライナ人が自国の核兵器を放棄することの是非を問うているという事実は、国際社会の前に横たわる選択の難しさを物語っている。しかし、困難だからといって、それを成し遂げようとしないうけにはいかない。

ウクライナは、国家安全保障に犠牲を払う可能性があるにもかかわらず、正しい選択をしたのだ。最終的に戦争が終わりを迎えたとき、それがいつになろうとも、ウクライナの軌跡を辿れるかどうかは、世界の国々にかかっている。